誰が一体、このつらい思いに耐えられよう。欄干に寄りかかり故郷を望み、北風に向かって襟を開く。平原は遠く見渡す限り続きそのはては荊山の高い峰に覆われている。道は長くはるかに延び、川には水があふれて、行くすべとてない。故郷がさえぎり隔てられているのを悲しみ、涙はとめどなく流れてこらえきれない。昔、孔子が陳にいたとき「帰らんかな」と嘆きを漏らし、鍾儀は幽閉せられて楚の音楽を奏し、荘舄は楚の高官であっても故郷である越の歌を忘れなかった。人の心は故郷を思うにおいてはまったく同じであり、出世していようが窮迫していようが変わりはない。

月日がずんずん過ぎ去ってしまいはしないかと思い、川の澄むのを待っても、まだその時期は至らない。王道がひとたび清平になり、帝王の大道を借りてわが才力を存分に発揮したく思い、ひさごがむなしく掛かって食べられず、井戸水が清潔なのに飲まれないようなのを心配する。歩きながらのんびりとくつろぐ。ふと見ると、夕日が沈もうとしている。風はもの寂しく辺りに起こり、空は暗暗として色がない。獣は慌ただしく振り返り群れを呼び、鳥は鳴き合い翼を上げて、ねぐらへと急ぐ。原野は静まり返って人影はなく、旅人だけが野中の道を急ぐ。心には悲しみがわき起こり、辺りに触発される。高殿の階段を下るに、気は胸中で乱れ憤りでいっぱいになる。夜は半ばになっても眠られず、いつまでも悲しみつつ寝返りを打つ。

（本文・口語訳ともに全釈漢文大系本による）。

（田中　陽子）